

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 27 日現在

機関番号：72681

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23652010

研究課題名(和文)スリランカにおける宗教対話の基礎的研究

研究課題名(英文)Fundamental studies about religious dialogue in Sri Lanka

研究代表者

釈 悟震 (SHAKU, GOSHIN)

公益財団法人中村元東方研究所・その他部局等・専任研究員

研究者番号：80270536

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文)：スリランカは長い内戦により社会的な平和の危機が続いてきた。スリランカ社会は現在経済復興に主眼があり、民族和解とその共存等の具体的な問題には、まだ手がついていないように思われる。しかし内紛の禍根、また再燃を未然に防ぐためにも、異民族、宗教間の相互理解が不可欠となる。幸いスリランカは対話と寛容の精神を醸成してきた歴史があり、本プロジェクトはその歴史を再発掘し、広くスリランカの人々に彼らの寛容と共助の精神史を知らしめる一助となることを目指した。その為に既に英文とシンハラ語にて宗教対話に関する書物も出版し、彼らの寛容の精神史の啓蒙活動を実践した。本研究の結果一層宗教対話が基礎づけられたと思う。

研究成果の概要(英文)：The crisis in social peace today has followed by a long civil war in Sri Lanka. Now Sri Lanka focuses on the current economic recovery, ethnic reconciliation dialogues, etc., but it has not achieved peace yet. In order to prevent a relapse of the conflict situation, it is necessary to bring mutual understanding between different ethnic groups, more intellectual dialogues are necessary. Fortunately Sri Lanka has a long history of fostering the spirit of tolerance and dialogue. This project is meant to re-discover this aspect of Sri Lankan intellectual tradition. And it is aimed to lead and help Sri Lanka to achieve authentic peace and give a proper assistance to the people of Sri Lanka. I already have published a book on a religious dialogue in Sinhalese and English. Further I wish to publish a new based on the result of the current project in Japanese as soon as possible.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：仏教とイスラムとの対話 南アジアの宗教変動 スリランカ仏教と他宗教の対話 スリランカ平和思想  
近代的寛容思想の限界 東南アジアの諸宗教対話 スリランカ諸宗教共存 異なる宗教との共存思想 和合

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、研究代表者釈悟震、連携研究者保坂俊司が参加した先行研究、すなわち基盤研究(A)(2)「中世インドの学際的研究」(研究代表者前田専學:2002-2004年、課題番号:14201003)並びに「インド宗教思想の多元的共存と寛容思想の解明」(研究代表者釈悟震:2007-2009年、課題番号:19202003)の研究成果を基礎としつつも、その発展的な展開を目指した研究である。つまり、先に提示した二つの先行研究プロジェクトは、アジアにおける寛容、あるいは平和的共存思想研究の先鞭を付けるような優れた研究であり、その成果も高く評価されてきた。しかし、地域的にはインド亜大陸を中心としており、当時内戦が続き深刻な民族、宗教対立のさなかにあったスリランカの研究には、大きな危険が伴っており、その研究に本格的に取り組む状況にはなかった。しかし、2009年以降内戦も終結し、ようやく本格的な研究を行うことが可能となった。その上、民族、宗教間の対立を超える寛容思想への社会的な必要性や要求も生じ、本研究はその意味からもスリランカ社会に大きな貢献ができる好条件下において実施できた。まず本研究は、スリランカの民族、宗教間の共存、共栄の思想の背景ともいえる寛容思想の展開について、文献研究と合わせて現地の現状を、フィールドワークを交えて総合的に研究する必要が痛感された。なぜなら、長い内戦の果てに、スリランカ人が自らの伝統である諸民族、諸宗教の共存思想としての寛容思想について、忘れてしまっている現状があり、またそれらの資料も時を経て消滅の危機にあり、その資料の発掘や保存、またその価値の傾向が必要と考えられた。

また、スリランカは8世紀以来イスラムとの共存を図ってきた稀な地域であり、その知恵が現在のイスラム VS 非イスラムの様相を呈している国際社会に少なからぬ価値があるという視点から、南アジアにおけるイスラムの拡大を研究している連携研究者保坂俊司と共に、フィールドワークを中心に研究を行なう必然性の価値基準が背景であった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、日本においてのスリランカ研究は四半世紀に及ぶ熾烈な民族紛争などの影響もあり、その研究は全体的に停滞気味である。しかし、スリランカにおいては、仏教を中心に異宗教間の平和的な共存・共栄を可能にしてきたという文化史的な伝統があり、その思想的研究はスリランカの研究領域においてのみならず、21世紀の国際社会に頻発する宗教対立や宗教紛争に対する解決策のヒントを提示するものと思われる。とは言い、釈悟震の研究「スリランカにおける仏教とキリスト教の歴史的対論」(『宗教研究』日本宗教学会、第357号 301-324、2008)に明らかなように、19世紀の中ごろに行われ

た世界的にも有名な宗教対論でさえ、昨今のスリランカにおいてはほとんど評価されていない。しかし、仏教文化の影響の強いスリランカ社会には、精神伝統として宗教的な寛容を重視する文化があった。この点は仏教を中心に先駆的な研究が、前田恵學博士等によりなされてきた。しかし、それらは仏教以外の研究、特に異なる宗教間対話の歴史や思想展開に関しては、ほとんど研究されることがなかった。本研究は、それらの先行研究の欠落を補うとともに、スリランカにおける諸宗教対話の思想とその歴史を発掘し、その現代的意義を明らかにすることにあつた。

特に、本プロジェクトの目標は、スリランカにおいてすら忘れ去られようとしている諸宗教共存の思想やその歴史的な展開である宗教対話の事実の発掘を通じて、スリランカの諸宗教共存思想の究明やその伝統の再評価にあつた。ここでまず、釈悟震は「パーナドゥラ論争」に象徴される仏教とキリスト教の対論の歴史的な事実のより詳細な研究を目指した。さらに、現在のスリランカにおいてすらその存在が忘れ去られている「パーナドゥラ論争」以外の宗教対話について、その資料の発掘と討論内容の解明を行い、合わせてその歴史的意義に関して再検討を試みた。というのも、「パーナドゥラ論争」が契機となり、19世紀の仏教復興運動や欧米における仏教の再評価運動がはじまったのであるが、その全貌は未だに明らかになっていないからである。

また連携研究者の保坂俊司は、長い歴史を持つゴール地域、コロンボ地域と最近急速にイスラム化しつつあるキャンディ 周辺のムスリムの現状とその歴史的発展、さらに彼らの異教徒理解や共存の現状をペラデニヤ大学のスタッフの協力を得て現地調査を踏まえて検討した。特に、スリランカ・ムスリムはその歴史の古さにもかかわらず、仏教との共存関係が深く、イスラムが伝播した諸国の中で例外的に他宗教と平和共存関係を維持してきた歴史がある点に注目した。しかし、スリランカ・ムスリムの歴史やその事態に関する研究はスリランカにおいてすら少ない。本研究はその停滞を打破し、イスラムの可能性の再検証を目指した。

もちろん本研究は、その重要性にもかかわらず本格的な調査研究が十分になされてこなかったスリランカにおける宗教対話の思想と、その歴史や文化的意義の解明を目指したが、その際単に個別的な宗教研究に留まらず二人の研究者が、それぞれの情報交換を密にして、同一のテーマ設定で研究することで、従来にはない研究成果を得ることを目指した。また、先のスリランカ発の宗教対話が19世紀初頭の世界的な仏教復興運動、さらには宗教対話の機運を醸成した事実の再評価により、21世紀における宗教対話、宗教共存の思想構築の先駆けになり、従来の研究では、成し得なかった、挑戦的かつ萌芽的研究を目指

したものであり、さらにその成果を社会的に活用できるような成果の獲得を目指した。

### 3. 研究の方法

本研究に関しては、文献研究とフィールドワークを積極的に行った。まず、釈悟震は先行する研究を受け継ぎ、深化する形で、積極的にスリランカの僧院や同国随一の大学（ペラデニヤ大学など）の協力を得て、現地調査と資料発掘のための聞き取り調査、図書館などが所蔵する資料の調査をおこなった。また、成果も積極的に公刊することをめざし、調査とともに積極的に現地の研究者や文化人に働きかけた。一方保坂俊司は、ほとんど研究がなされていないスリランカ・イスラムの現状を歴史的、また現状調査の両面から、資料研究と現地調査を主にインタビューを積極的に行った。

具体的に述べると、本研究初年度である平成23年度は、研究代表者の釈悟震は、研究全体を総括しつつ、「パーナドゥラ論争」に代表される仏教とキリスト教の宗教対話の全貌を明らかにするために、現地調査や資料収集をスリランカの名門ペラデニヤ大学（University of Peradeniya）やルフナ大学（University of Ruhuna）の協力を得て行う。特に、ペラデニヤ大学の仏教学部からは、ニャーナナンダ（Muwaetagama Gnanananda）学部長以下、全面的な支援を取り付けており、夏季と冬季の二回同大学の講師陣の協力の下に、パンチャ・マハヴァダヤ（Pannca Mahavadaya：五大論争）と呼ばれるバッドガマ（Baddegama）、ワラゴダ（Waragoda）、ウダンヴィタ（Udanvita）、ガンポラ（Gampola）、パーナドゥラ（Panadhura）の各論争について詳細な資料を収集する。これらの論争は、「パーナドゥラ論争」以外は、スリランカでもほとんど知られることがなく、その資料収集は現地人スタッフの協力を仰ぎつつ行う。さらに、最近の釈悟震の研究により1899年3月9日に、首都コロンボにおいて再びリスト教と仏教の大論争が行われたことが、明らかになりつつある。しかし、このような真実をスリランカの人々すらも忘れていた。そこで、これら歴史に埋もれた事実の発掘を中心に長期に及ぶ現地調査を行う。具体的にはスリランカの国立公文書館やペラデニヤ大学・ケラニア大学・コロンボ大学・ルフナ大学が所蔵する資料やそれぞれの開催地における現地での聞き取り調査を行った。

一方、スリランカの7パーセントを占めるスリランカ・イスラムと他宗教の関係を担当する保坂俊司は、現地人の協力を得て、古い伝播の歴史を持ちながら、他地域と異なり少数派宗教として仏教やその他の宗教との共存を図ってきたスリランカ・イスラムの今をさぐる。これらの研究によって、イスラムの拡大によって様々な問題が惹起されている今日の国際社会に一つの大きなヒントを与えるものとなり得る。そのために保坂俊司は

スリランカ・イスラムにおける古い歴史を、インドにおけるイスラム研究の経験を生かして研究した。特に、23年度は、スリランカ・イスラムに関する基礎データの収集に専念した。それは、本研究をインド・ムスリムとの比較に最適であり、南アジアにおけるイスラムの拡大や他宗教との共存という申請者のライフワークとの関連性に大いに有益と考えられた。

平成24年度は引き続き研究代表者の釈悟震は、本プロジェクトを総括すると同時に、引き続きスリランカにおける前世紀において激しくぶつかりあったパーナドゥラ（Panadhura）論争を始め、五大論争地の調査研究やコロンボ論争の調査を行い、埋もれている資料の発掘を行う。その際、前述の大学のスタッフの協力を求めて、スリランカの国立大学や国立公文書館やマスコミ各社などが所蔵する資料の閲覧や調査、さらには資料収集を行う。さらにその論争が起因となり世界的な仏教復興運動へと連なっていった思想的背景や運動の経緯を解明する。さらに七万人を超える死者を出した内戦の終結とともに、多数派で仏教徒中心のシンハラ人と、少数派でヒンズー教徒中心のタミル人の間に深刻な亀裂を生んでいる現在、スリランカ人による宗教対立を超えた平和社会の構築という社会的・政治的重要課題に対して、その解決策をスリランカの歴史の中から見出すための基礎資料の提示として、本研究成果をスリランカ人に向けて発信するための努力を行う。そのためのシンポジウム等を前述の大学スタッフの協力を得て開催する。

連携研究者の保坂俊司は、引き続きスリランカ・イスラム社会の歴史や文化の文献や日本在住のスリランカ人より情報を得て、聞き取り調査研究をするとともに、仏教とイスラムとの歴史的な交流について研究を行った。

平成25年度は、本プロジェクトの最終年度にあたり、釈悟震は本プロジェクトを総括しつつ、引き続きキリスト教と仏教間の論争の現地調査と資料収集と同時に整理を行い。研究論文や啓蒙書、さらにはメディアへの発表を行い、本研究が挑戦的かつ萌芽的研究として達し得たことに関して、またスリランカの諸宗教共存の思想やその現実展開の意味を広く世界に公表するように努める。保坂俊司もまた、キャンディを中心におけるムスリムと仏教徒の共存の在り方を現地調査などから資料を収集し、検討をかさね、今日までこれらの地域において研究されたことのない論考や啓蒙書等を挑戦的かつ萌芽的にまとめる。

### 4. 研究成果

スリランカは長い内戦により社会的な平和の危機が続いてきた。スリランカ社会は現在経済復興に主眼があり、民族和解とその共存等の具体的な問題には、まだ手がついていないように思われる。しかし内紛の禍根、ま

た再燃を未然に防ぐためにも、異民族、宗教間の相互理解が不可欠となる。幸いスリランカは対話と寛容の精神を醸成してきた歴史があり、本プロジェクトはその歴史を再発掘し、広くスリランカの人々に彼らの寛容と共助の精神史を知らしめる一助となることを目指した。その為に既に英文とシンハラ語にて宗教対話に関する書物も出版し、彼らの寛容の精神史の啓蒙活動を実践した。本研究の結果一層宗教対話が基礎づけられたに違いないと考えられる。

本プロジェクト初めの年度から具体的にその成果を詳説すると以下の通りである。

平成 23 年度は、研究代表者の積悟震が研究全体を総括しつつ、「パーナドゥラ論争」に代表される仏教とキリスト教の宗教対話の全貌を明らかにするために、現地調査や資料収集をスリランカの名門ペラデニヤ大学やルフナ大学の協力を得て行う計画を実施し、連携研究者保坂俊司は、スリランカ南部のイスラム密集地域のゴール地域のイスラムと比較的新しい改宗者が多い、仏教の聖地も近い中部丘陵地域のキャンディ周辺のムスリムの現地調査を行う予定であったが、渡航先のスリランカ国立ペラデニヤ大学並びにルフナ大学が学生運動などにより、大学が平常でない状況や、タミル民族との紛争が未だに完了されていない政治的不安要素もあり、現地調査ができなかった。しかし、平成 24 年度に実施すべく、諸般の実施計画に必要とする基礎的準備と共に、当該課題遂行のために、日本では初めて刊行される『上座仏教事典』に「スリランカにおける宗教対話の基礎的研究」に関わる多くの項目を執筆した。

平成 24 年度及び 25 年度の当該研究は、先ずスリランカへ渡航し現地の調査研究による挑戦的萌芽的に研究を進めることであった。

具体的にはスリランカにおいて 140 年前に、前後 5 回行われたキリスト教・仏教との教理論争に関する五大論争地を順次訪ね、現在の宗教の状況ならびに共存関係などを調査しその課題を解明することといえよう。と同時に、五大論争の思想的意義、諸宗教間の対話の現況を含む宗教的意味などを中心に現地の専門研究者を訪ね総括的調査を実施し、今日的な課題を明らかにするため関連の大学における資料収集などをも行った。

結果として、スリランカでは未だ「宗教対話」に関する意識が乏しく、今後においても宗教対話に関する必要性すら考えていない。一方においては国の政策により、スリランカ歴史上、長く続けられてきた「仏教優先政策」がなくなり、他宗教との共存を選んでいる。これらの現況を踏まえて、当該研究課題である「スリランカにおける宗教対話の基礎的研究」をより挑戦的進めるに欠かすことの出来ない基礎的資料として 1899 年行われた仏教とキリスト教双方が自らの宗教の優越性を主張するために国の許可を得て

公衆の面前で行った「Urugodawatta Maha Vadaya」つまり「ウルゴタワッターにおける大論争」をスリランカ民族の伝統的言語であるシンハラ語から英訳し、原本であるシンハラ語と英訳を合本にしてスリランカにおいて出版した。埋没されているシンハラ本は実に 64 年ぶりの再版であると同時に、初英訳によってスリランカだけではなく、宗教対話の重要性に関して正しく歴史的証言を通して世界に知らせられるに違いないと確信をしている。その実、日本やスリランカにおいて多くの反響を及んでいることから知り得る大きな成果の一つといえよう。

5. 主な発表論文等（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 5 件)

保坂 俊司、平和思想としての寛容思想の可能性について、中央大学政策文化研究所年報、16 号、査読有、中央大学政策文化研究所、2013、3 - 23

積 悟震、最初期仏教経典『テラガーター』における実存的業論、査読有、宗教と文化、22 号、2012、99 - 114

積 悟震、前世の仏教とキリスト教の対論 異宗教間の対話を願って、中外日報「論・談」第 27773 号、2012 年 10 月 27 日付

保坂 俊司、インドにおけるヒンドゥー・イスラーム融和思想の形成とその展開、公益財団法人 J F E 2 1 世紀財団、2012 年度大学研究助成アジア歴史研究報告書、2012、33 - 42

積 悟震、文化史的観点における業と果報の関係、宗教と文化、査読有、19 号、2011、87 - 110

〔学会発表〕(計 1 件)

保坂 俊司、中村インド学の継承と問題点、印度学仏教研究、62 巻、2 号、日本印度学仏教学会、2014、1058 - 1064

〔図書〕(計 9 件)

積 悟震 他、朝倉書店、仏教の事典、2014、580

積 悟震 他、めこん、上座仏教事典、2014(刊行確定)、500 推定

保坂 俊司 他、東海大学出版部、文明の未来、2014、336

保坂 俊司、PHP 研究所、[ 図解 ] 比べてわかる! 世界を動かす 3 宗教 ユダヤ教・キリスト教・イスラーム教、2013、158

保坂 俊司 他、春秋社、大乘仏教のアジア、2013、336

積 悟震(Shaku, Goshin) Udaya Graphics (Pvt)Ltd Colombo Sri Lanka、THE GREAT DEBATE OF URUGODAWATTA、2012、2013、223

積 悟震 他、法蔵館、アジアの仏教と

神々、2012、325  
保坂 俊司、学研パブリッシング、よく  
わかる世界三大宗教 キリスト教 イス  
ラム教 仏教、2012、129  
保坂 俊司 他、東海大学出版部、収奪  
文明から還流文明へ、2012、318

〔産業財産権〕

出願状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

釈 悟震 (SHAKU, Goshin)  
公益財団法人中村元東方研究所・専任研究  
員  
研究者番号：8 0 2 7 5 3 6

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

保坂 俊司 (HOSAKA, Shunji)  
中央大学・総合政策学部・教授  
研究者番号：8 0 2 4 5 2 7 4